

山の百の花

同人会員 鈴木 百合子

【61】シヨウジョウバカマ

葉はイワカガミなどとともに登山道脇によく見かけるのに、不思議と花を見ないのは、花期がこちらが雪山に夢中になっている早春の時期にあたるからだろうか。花はユリ科らしい控えめな可憐さでうつむき加減（誰かに似ているではないか！）。ヒガンバナを淡いピンクにして束ねたような姿をしている。それでも高山植物としては平凡。どちらかといえば地味な部類に属するこの花を、なぜあえてここであげるか。

ある時、仕事のつながりで植物学者の塚谷裕一（つかやひろかず）さんの植物採集に連れて行っていただいた。塚谷さんはヒマラヤのガネツシュヒマルルやボルネオ島のムラー山系など、入山することすら難しい地域の植物調査をされており、当時、岡崎市にある基礎生物学研究所にいらした。岡崎の丘陵地帯には古い低層湿地があり、そこに1万年前の最終氷河期にとりのこされた高山植物が逃げ込んでいるというのだ。それを探しに行く。ワクワクするではないか！

古地図と現在の地形図を照合して古い湿地をいくつか選び出し、車ででかけた。都心から30分。地形図をたよりに藪を漕いで

めざす湿地をさがす。都市化の波は地下水脈にも影響を与えるのだろう。ある湿地は涸れており、また別の湿地は緑化整備でつぶされていた。そうやって何度かがっかりしたあと、竹藪の先を歩く塚谷さんが「ありました」と言った。藪の中にぽっかりと空間が開け、そこに浅い水をたたえた湿地が広がっている。シヨウジョウバカマはその水ぎわあたり一面に爛漫と咲き乱れていたのである。息をのんだ。

その湿地では珍しいトウカイコモウセンゴケや絶滅危惧種のミミカキグサも見られた。また駐車場脇の別の湿地にはやはり絶滅危惧種のタヌキモの大群落もみつけた。「道なき道のはて」への手がかりは、なにもヒマラヤの高峰にばかりあるのではない。駐車場のすぐ脇にもその世界へ通じる扉があるんだ、ということを教えてもらった花なのである。



Kanji

【62】カンアオイ

カンアオイは恐らくへそ曲がりの植物愛好者に愛でられる植物だ。葉がシクラメンの葉のように地味な上に、花ときたら葉の下に隠れてほとんど見えない。しかも花とい

っても花弁はなく、暗い小豆色をした萼が花びらのように波打っているだけ。筒の奥に白い歯のような突起がみえる。私はこの花を見るといつもコウモリを思い出す。

いやだ、趣味悪い！という声が聞こえそうだが、じつはこの醜い植物、ギフチョウの幼虫の食草なのである。ギフチョウをご存知だろうか。まるで羽にルビーをはめたような美しい蝶だ。やはり絶滅が心配されている。成虫はカタクリやスミレの密を吸い、卵をカンアオイの仲間に産み付ける。幼虫ときたら、成虫からは思いも寄らない不細工な姿で真っ黒。カンアオイの醜さとピツタリくるといったら失礼か。カタクリやスミレに舞う美しい姿とは裏腹の時間。どうもそこに惹かれるらしい。

その話を聞いてすぐ、私はたまたまひっくり返したカンアオイの葉の裏に幼虫をみつけて、宝クジをあてたような気分になったものだ。晩春に丘陵や低山の林床で、地味なシクラメンのような葉をみかけたら、葉の陰を探してみたい。あなたのクジ運がわかりますよ！



Kanji

塚谷裕一「岡崎の植物」